

万葉集から平安文学へ

古 橋 信 孝

I 文学史の見方

- 1、文学作品の歴史的な位置づけ自体は作品の評価の一つであって、そうして評価した作品を時間的に並べることが文学史ではない。
- 2、言語表現、作品の目指したものの、書かれたものなどに文学固有の歴史的な流れを叙述するのが文学史である。したがって、俗の文学史が歴史状況から語り始めることによって、文学作品の歴史性が語られるように考えているのは誤りである。論者が、文学作品に独自の歴史性を見出すことによって、初めて文学史は可能になる。
- 3、その文学固有の歴史性とは、まずは文体の問題として考えられねばならない。その時代の社会、人と人の関係、自然や事物などを見る目は文体によって可能になる。したがって、どのような文体が生み出されたかが文学史の課題となる。あるいは、ある文体から別の文体が生み出されていく流れを叙述することが文学史となる。
- 4、古代歌謡から万葉集へは、歌の文体の確定化としてみられるべきである。口誦の歌を歌たらしめている様式が確定されるのが万葉集の歌だからである。つまり、五七を基本とした音数律と繰り返し、いわゆる「景+心」の構造など、万葉集の歌の様式は古代歌謡を受け継いでいる。したがって、文体としては、古代歌謡も万葉集の歌も同じとみなしていい。万葉集の歌はうたわれた歌を様式化することで歌となっている。その意味で、声から文字へのような見方がなされているのはかなり危ない。〈書く〉こともまた文体の問題として考えられるべきだからである。

II 万葉集の表記と〈書く〉こと、文体

1、万葉集の歌の表記にも、巻十六の最初から探せば、

「挿頭爾將為跡」(三七七八)、「常哉將恋」(三七七八)

七)、「無耳之」(三七七八)、「如今日」(三七九〇)、「

相不見在目」(三七九二)、「如是」(「將若異子等丹」

「所罵金目八」(三七九三)、「無事」(「我不言先丹」

「我者將依」(三七九五)、「隨欲」(「可赦」(「貌所見」

「我藻將依」(三七九六)

のように、漢文の語序で表記をしている。これを和文とみなすなら、和文と漢文の境界が曖昧になる。つまり、漢文で書かれていても、和文として読んでいる可能性がある。

2、このような表記の問題は直接的に文学の問題ではない。

表記は実用性に向かうのが基本である(小松英雄『日本語書史原論』笠間書院、一九九八年)。文学は実用性とは別の論理がなければならない。西条勉が指摘するところ(「天武朝の人麻呂歌集歌—略体/非略体の概念を超えて—」『季刊文学』一九九九年秋号)だが、従来の万葉集の表記論は、作者の内面の表出が文学の価値であるという、近代のイデオロギーである文学観(鈴木貞美『日本の「文学」概念』作品社、一九九八年)からなさ

れており、そういうことへの自覚もなく、〈書く〉ことへの論理がない。

3、歌の場合、〈うたう〉なかで文体を作り出しており、

〈書く〉ことによる質的な変化は〈うたう〉ことを装うものとしてある。〈書く〉ことが表現の質的変化に決定的に関係するのは散文においてである。木簡学の成果により、八世紀には和文の文脈でそうとう程度表記できるようになったにもかかわらず、仮名文学の登場が十世紀まで下るのは、まさに仮名の散文文学を〈書く〉ことの困難さを示している。かつて益田勝実が昔話がいくら積み重ねられても物語文学にはならないと論じた(「物語のフィクションとフィクションの物語」)のと同じに、〈書く〉ことの積み重ねが直接文学になるわけではない。〈書く〉ことは内省をもたらし、表現が推敲されるといった単純な俗説は、口誦文芸も繰り返されるなかで洗練されるものになることを考えていない。もちろん、自己表出性も口誦文芸にも指摘できる。言語そのものの問題だけでなく、人類が言語をもつことの意味の問題でもあるのだ。

だいたい、声から文字というような論を立てている者のほとんどが口誦文芸のフィールドにふれたこともないのではないか。このような問題の原理を考えようとした

成果である文化人類学者川田順造の『口頭伝承論』(河出書房新社、一九九〇年)を引くことによつて考えたよ
うなふりをしている。もちろん、フィールドに出なくともいい。ただ、それに見合うのは「書く」ことを徹底的に考察すること以外ない。それがないから、たとえば、表現の差異を書くものになつたからと安易に説明しようとする。

4、私は「書く」ことは文体をもつことだと考えている。この文体という概念は広く考えておきたい。

私が書くものには私なりの文体がある。それは、書くことによつて自然に働いていく思考の型があることを意味している。思考の型を取り出せないわけではないが、ふだんは他の思考もすることがある。ただ、われわれの時代は書くものが氾濫し、幼児期から書物にふれ、そして書くことを初めてから長いから、思考が書くことと密接にかかわっている。原稿を書き始める際、明確な進め方や結論を決めて書き出すわけではない場合が多い。書いていくなかで、別の方向にいつたり、史料をあらたに調べなくてはならなくなつたり、極端な場合は結論が違つてしまうことさえある。私は基本的に、自分が作り上げてきた文体を信頼しているから、書き始めることによつてのみ、書き続けることができる。

そういう文体だけでなく、漢文体、和文体とでも呼べるおおかたな文体がある。これは、和歌によつて表現されるものと漢詩によつて表現されるものに違いがあるように、歌の文体、漢詩の文体に表現が規定されているからだ。もちろん、現代の文体は漢文訓読の文体もそうとう関係している歴史性のなかにある。また、散文には、書簡体、日記体、記録体、小説体などもある。むしろあまり厳密にしないで、文学は文体だといつていいと考えている。

古代において、まず考察すべきなのは、歴史性として、誰々の文体というより、歌の文体、散文の文体、漢詩の文体、漢文の文体などを把握しておくことなのではないか。漢文の散文体にも変化がある。たぶん、万葉集の巻十六の物語的な題詞や左注はそれまでなかった文体で書かれており、それには魏晋南北朝の小説の文体が関係している。そういうように、文体から考えていくことによつて明らかになることが多くある。

5、古代文学を読んでいて、それ以前を知りたくなるといふ知の方向がある。特に古事記や日本書紀は、村落的な神話や歴史叙述を知りたくなる。声から文字へもそういう方向と納得はできる。一九七〇年代に、戦後民主主義への疑問を含め、既成の価値観への疑いが文化、思想全

体に大きな流れとなった。文字は権力者のもので、まさに庶民の声を殺し、変型していったものと思われ、村落の表現を求める動きが起こった。民俗への関心が高まり、そして、当時「返還」されたオキナワの村々に伝えられている祭や歌謡に触れてみようとする流れがあった。

私も古代文学研究者のなかでは比較的早くオキナワへ行つたほうだと思ふ。東京生まれ、東京育ち、そして高校から大学の教養学部ではヨーロッパの思想や文学ばかり読み、洋画ばかり見てきていた私には、オキナワといっても、宮古、八重山の村々だが、村々のあり方、祭の演出、歌謡などに圧倒され、八重山に通うことになってしまった。もちろん、フィールドは何を見ようとしていたかによって見方が異なる。私は文学への関心から近づいたから、神話が神謡としてうたわれており、神話と呼べるものは説明の言葉だから、語る人によって異なるということに最初の衝撃を受けている（『古代歌謡論』冬樹社、一九八二年）。そこから、神謡論へ向かうことになった。そして、小野重郎の「生産叙事」という概念を読み、「巡行叙事」など叙事の様式を見出すことになる。さらに、古代歌謡、万葉集にも似通つた様式があることから、それ以前に神謡があったことが証明でき、古代歌謡、万葉の表現が神謡からの変質として表現の価値

を評価する基準を見出すことになる（『古代和歌の発生』東京大学出版会、一九八八年）。言い換えるなら、文体である。文体がなければ歌はないということを明確に自覚したのはオキナワだったことになる。

そして、ここ十年ほど、宮古の狩俣の叙事的な歌謡にふれ、またカンカカリヤ（神憑り人＝霊能者）の語る神話にふれ、物語文学に関心が向かった（『神話・物語の文芸誌』ペリカン社、一九九二年）。そういうなかで、ふたたび口誦されているものと「書く」ものとの問題に「書く」側から深刻に出会うことになった。様式から始まっているから、「書く」ことが文体という論点になるのは必然的だった。

III 万葉集から平安文学へ

1、万葉集から古今和歌集へは、平安初期の勅撰漢詩集などが間にあり、漢詩文との関係が現在も精緻に行われている。

2、散文文学については、以前に仮名の散文文学がないゆえ、散文精神のようなもの、中国古典文の小説などの影響、伝承文芸との関係などから考察されてきている。

万葉集と平安仮名文学との間の百五十年にも、その流れが見出せないはずはない。なぜなら、時に平安朝の書き

手は読書人でもあったからだ。つまり唯一の仮名文学である万葉集を読んでいるはずはなく、それが踏まえられて書くことがなされたはずである。

- 3、大伴旅人の妻を亡くして大宰府から帰る途中の、そして帰宅直後の歌（卷三・四三八〜九、四四六〜四五三）と紀貫之『土佐日記』の類似性。貫之は万葉集の旅人の歌を読んで『土佐日記』を書いた（古橋『和文学の成立』若草書房、一九九八年）。「竹取物語」は『万葉集』の竹取翁の歌の表現の中心である青春の輝きを仮名の散文として書くことをしようとしている（古橋『物語文学の誕生―万葉集からみる文学史―』角川叢書、二〇〇〇年）など、唯一の仮名文学であった『万葉集』を受け継いで、仮名の散文文学が書かれている。
- 4、万葉集には二つの意識があると思われる。中国の詩と比肩するものとして和歌を位置づけることと、むしろ和文の詩として位置づけることである。この二つは混在しているかまわれない。ここでは後者の位置づけをしてみる。和文の詩を記そうとしたとみるなら、題詞部も和文的に読まれていい。それが漢文訓読と繋がる。
- 5、ならば、卷十六の物語的な題詞や左注と歌の組み合わせは、平安期の仮名文学である『伊勢物語』に直接繋がることになる。3で述べた『土佐日記』『竹取物語』と

並べてみれば、それぞれの文体の仮名文学が奈良時代の唯一の仮名文学である万葉集に始まっていることがわかる。

IV 卷十六の物語的な題詞や左注から歌物語文学へ

以上述べたことを前提として、万葉集卷十六の物語的な題詞や左注が平安期の歌物語と繋がることを明らかにしたい。私はすでに『物語文学の誕生―万葉集からみる文学史―』で、この問題を論じている。その論点は、

- (1)、卷十六の物語的な題詞や左注も和文を意識して書かれている可能性がある。
- (2)、卷十六巻頭の桜児の題詞は芦屋うなる処女の歌（巻九・一八〇九）を散文で書いたものである。
- (3)、物語的な題詞や左注の語り出し部は均一性をもっている。葛城王の話（三八〇七）だけが異なる。
- (4)、卷十六の物語的な題詞と左注は全一二組あるが、そのうち葛城王の話だけが実在の人物の話で、他は無名か竹取翁、桜児など伝承的、説話的な名をもつ者の話である。
- (5)、葛城王の話と、竹取翁の組は長歌と一一首の反歌、答歌からなり他と大きく異なるので除くと、残りの十組の内容は物語的な題詞や左注は、

①一人の女を複数の男が求婚する話―(三七八六、

七) (三七八八) (九〇) (三八一四、五)

②親に秘密で通じている男女の話―(三八〇三) (三八〇六)

③男と長い間別れており、病になった女のもとへ、ようやく男が来る話―(三八〇四、五) (三八一一) (三)

④男の気持ちが変わる話―(三八〇九) (三八一〇)

⑤鄙の夫婦があらためて女の美しさを見直し、女に情愛を深くする話―(三八〇八)

の五つに分類できてしまう。しかも、①④が二組づつ並べられる。他にもいろいろ話がありそうなものなのに、このように二組づつ、四つと一つに分類されてしまうのは意識的なものとしか考えられない。これは、〈書く〉話としての類型を作ろうとしていることを示すのではないか。つまり物語を書くには類型を必要としたか、あるいは、二組づつ書いてみたか、どちらかであろう。

(6)、十組の物語的な題詞と左注はすべて男女の愛情を主題としている。

ということになる。

これらのうち(3)について、かんたんに述べる。巻十六の

物語的な題詞や左注の語り出し部は、

昔者有_二娘子_一。字曰_二桜児_一也。(三七八六、七)

或曰。昔者有_二三男_一。同娉_二一女_一也。(三七八八) (九〇)

昔者有_二壮士与_二美女_一也。(三八〇三)

右伝云、時有_二女子_一。不知_二父母_一竊接_二壮士_一也。(三八〇六)

右伝云、昔有_二娘子_一也。(三八一〇)

右伝云、時有_二娘子_一。姓車持氏也。(三八一一)。

というようなもので、「昔者有_二(人物)_一」……「也」か「時有_二(人物)_一」……「也」を基本形としうる。(三七八六、七)の題詞でいえば、「昔、娘がいた。名を桜児といったのだった」とでも訳せる、語り出しの定型的な文体といえる。「昔者有_二(人物)_一」……「也」の型は、『古事記』応神天皇条の、天の日矛関係の伝承を語る部分に唯一の例がある。これは、この系統の話が他のものと区別されるものであることを示している。他が事実として記されていると考へれば、昔話的なものと考えられたのであろう。巻十六の物語的な題詞や左注はその文体で書かれている。このような文体と同じレベルにあるのだから、「時_二有_二(人物)_一」……「也」も、同じに考えていいだろう。「ある時」と語り出すのも、物語の型だ。

また、この「……也」について、阪倉篤義が、歌物語の

係り結びにあたると論じている。「歌物語の文章」『国語国文』二二巻六号、一九五三年六月。

このように語り出し部の共通性は物語をへ書くゝ文体の試みと考えていい。このような文体の獲得が仮名の物語文学を導いた。

ちなみに『風土記』の「昔」は「也」をもたない。ほとんどの『風土記』の漢文体が一二点くらの返り点でいたいすむかたんなんものであることとかかわって、物語的な文体を意識していない、ただ記録する文体だということである。

(4)の登場人物の無名性について

葛城王の話だけが歴史上の有名な人物で、他は、桜児などはあだ名的、車持氏という氏族名のみというように、個人として確定できない者を主人公にしている。これは、どこの誰だかわからない、逆にいえば、誰でもがなりうる者を主人公にしていることを意味している。これは、正統的ではない、ささいなもの、つまらないものを書く、魏晋南北朝の小説の影響を考えるべきだが、それらはほとんど名を記すのに対し、物語的な題詞や左注の主人公たちは無名である。古代日本は小説を書くのに、まさにつまらない、そこらへんにいる者を対象にしたことになる。たぶん、正

統の観念が日本では異なっていたことだろう。巻十六の物語的な題詞や左注が後の物語文学に繋がっていることの証明にもなる。とにかく、このような無名の者への関心が魏晋南北朝の小説によつてもたらされたものということは確かと思う。

(6)の男女の愛をテーマにしていることについて

これも、まさに後の物語文学がへ書くゝテーマである。しかも、『伊勢物語』との類似も指摘されている(中西進「愚の文学」『中西進万葉論集』第六巻。伊藤博「有由縁雑歌」『万葉集の構造と成立』下)。

このような特徴は、巻十六の物語的な題詞や左注がへ書くゝ意識をもつて書かれたことを示しているが、これに、(7)、和文的な漢文体がみえる。

この点を付け加えておきたい。「物語文学の誕生―万葉集からみる文学史―」ではふれられなかった問題である。

商交 領為跡之御法 有者許曾 吾下衣 反賜米

(巻一六・三八〇九)

へ商交り領らすとの御法有らばこそ吾下衣反し賜はめく

右伝云、時有所幸娘子也。「姓名未詳」。寵薄

之後、還_レ賜寄物_一「俗云_三可多美_一」。於_レ是娘子怨
恨、聊作_三斯歌_一献上。

の、「時有所_レ幸娘子_二也_一」は、「所_レ幸娘子」と誰に寵愛さ
れたのかわからない書き方で始まる。そして「寵薄之後、
還_三賜寄物_一」と、その誰だかわからない男を主語とした文
になつてゐる。これは、和文なら成り立つが、中国古典文
ではほとんどないといつていい文だ。この男は女に対して
身分が高いと思われるが、和文の場合、そういう男をぼか
して書くことがある。

この左注の文は和文的な漢文といえる。最初に述べたよ
うに、漢文で書いてあるといつても、和文的である可能性
がある。といつて、文は漢文しかなかつたから、やはり漢
文で書くこととしたことはまちがいない。もつと和文的な文
は木簡に見出せるからだ。ただ、和文を意識して物語を書
こうとしたとはいえる。このような試みが、仮名と仮名文
の成熟をまつて、一気に物語文学を開花させることを可能
にしたと考えられる。

奈良時代まで、和文は和歌しかなかつた。韻文は定型だ
から、そのまま書くことができた。もちろん表記というレ
ベルである。たぶん、一字一音で和歌を記すことが和文
への意識を高めた。しかし、物語を和文で書くにはそうと
うの飛躍が必要である。従来の文学史は仮名と仮名文の成

熟のみを十世紀の突然の物語文学の開花に考えてきた。し
かし、文体という最も重要な問題を考えると、和文の物語
を〈書く〉試みがなければならぬ。今のところ、和文学
は万葉集しかないのだから、万葉集に淵源があるとみるの
がいいだろう。それが巻十六の物語的な題詞や左注に見出
せるわけだ。

本稿は、平成十二年五月二十七日の長野県立短期大学に
おける上代文学会大会の講演に用意したレジュメをある程
度文章化したものである。ただし、あらためて書くにあた
り、補ったり、消去したりしており、まったく講演と同じ
ではない。といつて、講演したときに考えていたことから
ほとんど離れていない。より伝えたい内容を明確にしただ
けだが、魏晋南北朝の小説については、その後学んだこと
を少しだけ加えてある。魏晋南北朝の小説には男女の愛情
についての話は、死後に会うなどとして、志怪小説にいく
らかみられる以外なく、古代日本の物語とは大きく異なる
のではないかと考えている。